様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４４２７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３６００３０

研究課題名（和文）日本と韓国の文化空間における〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象をめぐる比較研究

研究課題名（英文）Representation, identity and cultural space: A Comparative study on collective memory and Mutual image in postwar Japan and Korea

研究代表者
李　恵慶（LEE, Hye-kyoung）

大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：２０６４８７３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日韓の〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象における政治的無意識を、様々な文化生産物から明らかにすることが主な目的であった。そのため、本研究では、①日本と韓国の相互イメージ・表象・記憶の系譜学、②相互イメージ・表象と国民的記憶の形成や変容における歴史的・政治的・社会的諸条項の比較分析、③歴史的トラウマをめぐる記憶・忘却・癒し、④両国の〈戦後〉認識とポスト植民地的状況、の４つの切り口からテクスト分析を行い、相互イメージ・表象の変容における歴史的・政治的・社会的諸条項を比較分析しながら日韓の〈戦後〉認識とポスト植民地的状況を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：The primary purpose of this research project is to clarify the politics unconscious of self-other representation and identity politics in postwar Japan and Korea. After the World war II, Japan has a troubled and complicated relationship with Korea. Korean identity has long been measured against and framed in opposition to Japan.The issue of anti-Japanese sentiment in Korea is complex and multifaceted. Moreover, issues of Japanese policy regarding World War II often incur huge disputes between Japanese and Korean. Based on these considerations, the aim of the project is to rethink the national identity and the politics of memory in postwar Japan and Korea, and further demonstrates that the two countries can complement their cultural differences and stereotypes.

研究分野：地域研究

キーワード：戦後　ポストコロニアル　自己/他者表象　記憶の政治学　政治的無意識　相互認識　ステレオタイプ

１．研究開始当初の背景

（1）申請者はこれまで文学や映画を主な研究対象として、日本や韓国の〈戦後〉について問い直してきた。なかでも特に「国家」「民族」「言語」「ジェンダー」といった自己同一性構築に不可欠な諸要素を中心にその表象がアイデンティティ政治をいかに可能にし、強化しているのか、また戦争や戦死をめぐる表象がさらなる「国民的記憶」の再生産にどのような役割を果たしているのかを明らかにした。

（2）記憶や表象に関する研究は1990年前後に従来の伝統的で強固で一元的に表象されてきたアイデンティティを相対化し、「国民的記憶」を反省的に解剖しようと世界中でほとんど同時代的な現象として登場した。しかし解剖どころか、逆説的にもまた別のナショナル・ヒストリーを作り上げてしまうという結果となった（例：フランスの「記憶の場」のプロジェクトにおける「フランス的なるもの」の再構築と植民地主義の忘却など）。それに対する深い反省から近年、新たな研究の地平を打ち立てているのが日本を含む東アジアである（板垣竜太他編著、『東アジアの記憶の場』、河出書房新社、2011年、陳光興、『脱帝国――方法としてのアジア』、以文社、2011年、ジャン・インソン、『戦後日本の保守と表象』、ソウル大学校出版文化院、2010年）。これらはいずれも従来の記憶・表象研究が見逃していたポスト植民地研究の可能性を探っており、その点は高く評価できる。しかしながら主に終戦直後に光を当てたもので、今日に続く展開についてはまったく考慮されていない。また比較の観点を取っているものの、アジア諸国における不均衡で複雑な力関係は明確にされていないなど、いくつか検討すべき課題を残している。
本研究計画はこれまでの申請者の研究内容をより深化させ体系化しながら、近年の東アジアをめぐる新たな学術的動きを批判的に捉えたものである。

２．研究の目的

(1)アジア太平洋戦争や第2次世界大戦後、日本と韓国は〈戦後〉をどのように認識し、〈他者〉として互いをどう描き自己成型してきたのか。そしてそこにはいかなる政治的無意識が働いているのか。日韓の〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象における政治的無意識を、社会的影響力の強い文化的生産物から比較社会文化論的に分析しながら、日韓の新たな関係構築と一層の相互理解増進のための足掛かりを示すことが本研究の主な目的である。

(2)そのため、日本と韓国の〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象における政治的無意識を、社会的影響力の強い文学・映画・ドラマ・戦争メモリアルから多角的に比較分析し、そこにどういった特徴と違いがあり、相互認識や国民感情とどうリンクしているのか、そして文化的生産物がそうした認識や感情の変容と再構築にいかなる役割・機能を果たしているのかを明らかにする。

３．研究の方法

(1)日本と韓国の文化空間における〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象に関する総合的比較分析を行うために、本研究計画では、①日韓の相互イメージ・表象・記憶についての時系列、ジャンル別の体系化、②相互イメージ・表象の変容における歴史的・政治的・社会的諸条項の比較分析、③国民的なトラウマとしての歴史的出来事をめぐる記憶と忘却の問題、④日韓の〈戦後〉認識とポスト植民地的状況、の4つ研究項目を設定して研究を行った。それぞれの項目は独立していながらも、互いに深く関連し合っているため、全体的には日本と韓国の〈戦後〉の記憶と相互イメージ・表象において統合されている。

(2)より体系的で横断領域的な研究を行うため、国内外の研究者らと研究会や打ち合わせを重ねた。国内では以前から関わっている研究会や読書会（思想・理論研究会、ジェンダー研究会など）の研究仲間らと自主研究会を行い、本研究計画の研究内容や成果を共有しながら専門的な議論を重ねた。また海外では、韓国における日本文学・文化、歴史学、比較社会学、映画学などの専門家と打ち合わせや勉強会を行い、関連分野の最新の研究状況や先行研究などに関する知識と情報を共有した。

４．研究成果

(1)上記の研究目的及び研究方法に従って研究を行い、以下のような研究成果を得ることができた。特に本研究では、日本と韓国のポストコロニアル、記憶、自己／他者認識などの研究において、〈戦前〉〈戦中〉の研究に比べ盛んとはいえない〈戦後〉に焦点を当て相互のイメージや表象を体系化することにより、これまで余白として残されている領域に迫ることができた。これは今後の東アジアのポストコロニアル研究において多くの示唆を与えることになると思われる。具体的な研究成果については以下の通りである。

①太平洋戦争をめぐる記憶の戦争について：20世紀は戦争の世紀といわれる。世界各地では今もなお多くの戦争が繰り返されている。その中、ある戦争が終わると記憶の戦争が始まる。ルナンの国民の定義を想起するまでもなく何を記憶し、何を忘却するかという問題は、ナショナルな主体形成において欠かせないものである。さらに、世界経済の急速なグローバル化に伴い、どの地域でも異なった歴史や文化、伝統、記憶を持った集団によるトランスナショナルな社会空間が創出

されつつある今日において、それはなお重要な問題であり続けている。本研究では、近年日本でも話題になった『竹林はるか遠く――日本人少女ヨーコの戦争体験記（*So Far from the Bamboo Grove*）』を取り上げ、歴史認識及び記憶の問題をめぐるトランスナショナルな展開がどのようなものなのかを考察した。なかでも日系アメリカ人と韓国系アメリカ人との「戦争の記憶」が、韓国やアメリカを巻き込んだ「記憶の戦争」に注目し、その背景における政治的無意識を探るとともに、戦争の悲惨さを告発するはずのこのテクストがいかにそれを裏切り、ナショナルな自己肯定という大きな物語へ包摂されていくのかを明らかにした。

②三島文学と〈戦後〉と〈天皇〉：昭和文学史のなかで三島由紀夫ほど、昭和という時代に拘泥した作家は他にいないと思われる。そのため、三島文学の「問題」は、ほとんど昭和とは何かという問いと同義である。これは彼が昭和元年に一歳を迎え、昭和と共に、あるいは異端児として昭和の「外」で四十五年を生き、終局には衝撃的な最期を逃げたという神話的理由によるのではないのはいうまでもなく、たとえば「私の文學の表現しようと企ててゐるものが「時代」とその意味とである」という一節から読み取れるように、三島文学が彼自身の「年代の釋明」、つまり昭和という時代の釈明に費やされているからである。「「時代」とその意味と」に拘り、その釈明を文学者の最大の仕事としていた三島にとって、昭和は特権的な時代に他ならず、昭和の歴史の連続性を断ち切った敗戦の経験と切っても切れない関係にある。
そうした三島にとって、特に二・二六事件と敗戦の経験は大きな意味をもつ。どちらも「偉大な神が死んだ」（歴史的経験として、三島文学に多大な影響を及ぼしている。まるでバタイユの『エロチシズム』を彷彿させるこの「神の死」の経験は、時代の釈明を文学の存在理由とする三島にとっては避けて通ることのできない最も根源的なものとして、つねに引っかかっている問題である。そのため、三島文学には「神の死」によって不在となった「天皇」が絶え間なく召喚され、その「死」が問われている。それを明らかにするため、本研究では三島文学の後期作品を中心に天皇がどのように描かれ、そこで何がとわれていたのか、三島の天皇論を中心に日本の〈戦後〉を問うた。

③中上健次における日本と韓国のポストコロニアルな状況に対する文学的試み：中上健次は、「路地」という文学的虚構空間を通じて”紀州熊野サーガ”と呼ばれる独自の文学世界を築き上げていた作家である。そうした彼が自ら自分の真近なトポス「路地」を解体し、自分の分身でもある物語の主人公「秋幸」と決別してしまう。「路地」の作家にとってそれがいかに衝撃的な出来事であるのかはいうまでもなく、中上文学は大きな文学的変容に迫られる。本研究ではその変容を、「路地」解体後に新たに登場した「韓国・ソウル」というトポスの特権性に焦点を当てて明らかにしつつ、また多くの矛盾に満ち、これまで評価の低かった中上後期文学の新たな解釈可能性を探った。
中上文学において「韓国・ソウル」は「路地」のモデルになった紀州・熊野と不可分な関係にあり、きわめて特権的なトポスといわなければならない。「クマノ植民地主義の元」という語はそれを端的に示すもので、「路地」喪失後、新たな文学的トポスとして発見された「韓国・ソウル」の特権性がすべて集約されている。それが具体的にどういったものないか、本研究では特に『物語　ソウル』と「町よ、ソウルイテウォンの女」というテクストの分析から析出した。中上にとって「クマノ植民地主義の元」を問うことは、「日本」と「韓国」を問うこと、つまり両国のポストコロニアルな状況への問いに等しい。

(4)韓国におけるポストコロニアル状況と日本認識：韓国は現在歴史認識をめぐる戦争の真っ只中にある。それを端的に示しているのが、『百年戦争（Hundred Year’s War in Korea）』というドキュメンタリー映画とそれをめぐる激しい議論である。この映画は、2012年から「民族問題研究所」という民間団体により自主制作・公開された新しいスタイルの歴史ドキュメンタリーである。全六作のシリーズのうち、現在、李承晩を主題化した『二つの顔の李承晩――あなたの知らない李承晩のすべて（Two-Faced Syngman）』）と、朴正熙を主題化したスペシャルエディション『フレーザー報告書――誰が韓国経済を成長させたのか（Fraser Report）』の二作が民族問題研究所のホームページとインターネット動画サイトにて公開されている。なかでも韓国の世論を二分しながら大きな社会問題となかったのが前者の『二つ顔の李承晩』である。この映画をめぐっては制作元の民族問題研究所と李承晩の擁護者の間で激しい論争が展開され、現在は法廷闘争にまで持ち込まれ、泥沼化している。
「新しいスタイル」を標榜した『百年戦争』はインターネットの爆発的な情報伝達力と相まって多くの人を巻き込み、歴史認識をめぐる白熱した議論を巻き起した。「親日」対「反日」という韓国社会において最も根深く深刻な問題に火を付け、韓国国内を「内戦」の状態にしたこの映画の社会的影響力はきわめて大きく、当然それに比例して責任も増す。ところが、この映画は看過できない大きな矛盾を孕んでいる。本研究では、戦後の韓国社会の親日／反日をめぐる歴史的記憶と表象の政治学がどうようなものなのかを浮き彫りにしつつ、この映画の矛盾＝暴力性を明らかにした。

④慰安婦映画研究：長い間、東アジアの文化空間において「従軍慰安婦」が取り上げられることはほとんどなく、特に韓国と中国では禁忌とされてきた。だが近年、その状況は一変し、「従軍慰安婦」を主題化した文化生産物があらゆるジャンルから量産され消費されている。なかでも映画や漫画、ドキュメンタリー、アニメーションなどの視覚文化領域での動きが目立ち、その発信力と社会的影響力は東アジアの「従軍慰安婦」をめぐる歴史戦争をアメリカ化＝世界化させながら、これまでにない困難かつ複雑な状況を生み出している。そうした状況を鑑み、本研究では『ウリ・ハルモニ』という慰安婦映画を取り上げ、「慰安婦」表象の可能性と限界について問うてみた。『ウリ・ハルモニ』は、タイトル通り、従軍慰安婦＝ハルモニらを主題化にしたドキュメンタリー映画である。何より現役高校生たちによって制作・公開されたことで、大きな話題を呼んだ。しかしこの映画は様々なかつ深刻な問題を孕んだ問題作といわなければならず、慰安婦を主題化したとはいえない。本研究ではそうしたこの映画テクストの「問題」を、映画に登場するハルモニたちの表象を中心に分析し、そこに書き込まれている政治的無意識をあぶり出した。

(2)日本と韓国でのフィールド・ワークや資料収集を通じて得られた様々な研究資料が思った以上に膨大で、多方面にまたがっていたため、研究期間内に分析し切れなかったものがある。そのなかの一部は 2016 年度から始まる新たな研究課題と深く関わっているため、今後も引き続き分析を行い、まとめていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①李恵慶、よみがえる三島文学――後期文学における「天皇」をめぐる新たな解釈の試み――、『アジア太平洋研究センター年報 2013-2014』、査読無、第 11 号、2014、10―16
http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/publication_2014-02.pdf

②李恵慶、テクストを裏切るテクスト――『竹林はるか遠く』における戦争の記憶と記憶の戦争――、『アジア太平洋レビュー』、査読有、2014、38―52
http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/review_2014-04.pdf

③李恵慶、中上健次の"韓国・ソウルサーガ"をめぐる小論――短編小説「町よ、ソウルイテウォンの女」を読む――、『アジア太平洋年報 2014-2015』、査読無、第 12 号、2015、10―17
http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/publication_2015-04.pdf

④李恵慶、韓国のポストコロニアルな状況を問う――歴史ドキュメンタリー映画『百年戦争』を手がかりに――、『比較文化研究』、査読有、第 119 号、2015、331―342

⑤李恵慶、「慰安婦」表象のかの巣栄と限界――ドキュメンタリー映画『ウリ・ハルモニ』を例に――、『アジア太平洋研究センター年報 2015-2016』、査読無、第 13 号、2016、43―49
http://www.keiho-u.ac.jp/research/asia-pacific/pdf/publication_2016-06.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
李恵慶（LEE, Hye-kyoung）
大阪経済法科大学・アジア太平洋研究センター・客員研究員
研究者番号：20648737